

「コラボ教育での学び」

～地域での学びが看護実践にどう活かされたか：学生のまとめから～

前号となるちいき通信2017春号「コラボ教育での学び」で報告した「看護学ゼミナール」（4年生、選択科目）での活動を今回も報告します。10月に行った最終ゼミでは、1年次から4年次までCOC事業科目を受講してきた4年生に、①「コラボ教育が実習での看護実践にどのように活かされたか」、②「多職種との連携が看護を実践する自分にとって持つ意味」、③「COC事業科目のよかった点・改善してほしい点」の3つをテーマに、グループに分かれ学生間でディスカッションし、KJ法でまとめてもらう作業をしました。本誌では①のテーマについて報告します。なお詳細については、COC事業実績報告冊子第5号をご覧ください。活かされた内容は、「健康観」「退院支援」「地域活動」「生活者」の4つの点にまとめられました。

健康観：健康に対する価値観が多様であること、1人1人にとって地域で暮らすことの意味

退院支援：地域での暮らしをイメージした退院支援、地域の特徴を知ることが退院支援においても重要

地域活動：地域包括支援センターの働きを理解、民生委員、ボランティアが地域の健康を維持・増進

生活者：入院患者を生活者として考える、対象者の背景を知る

今年8月に行った本学卒業生（平成21～28年度卒）を対象としたアンケート調査でも、教育ボランティア導入授業が現在の看護実践に役立っていると回答した割合は8割となっていました。地域住民の語り、地域での演習は、生活者を支える看護の役割を十分に認識させてくれる場となっていることがうかがえました。

（ゼミ担当教員 相原洋子・記）



3 大学合同報告会プラットフォーム
ポスターセッション

「COC 研究ひろば 第10回」

～中規模急性期病院における継続看護の実践力の強化～

神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター運営委員長 石原逸子

COC の共同研究を行っているB病院は、急性期中規模病院であり、市民の生命と健康を守るために、安全で質の高い医療提供を理念とし、地域の中核病院としての機能を担っています。近年、在院日数の短縮化や地域住民の高齢化に伴い医療依存度の高い高齢者が入退院するケースが増えています。したがって、B病院では、このような患者を切れ目なく在宅医療につなぐ質の高い継続看護の提供が求められています。

本研究は、B病院地の看護職の協力の下で、継続看護の推進を目的に共同研究を平成26年度より行っています。4年間の共同研究の結果、1. 医療側・在宅側関係者の連携に必要な研修の実施と情報の共有による実践の質を高める取り組みの必要性、2. 患者とその家族及び病院側医療関係者双方の社会資源の活用に関する認知度を高めること、3. 院内の看・看護連携について、看護師間での情報共有や地域医療在宅支援室、外来、病棟等の所属部署の違いによる個々の役割の違いを認識すること、4. 看護師間の連携を推進し継続看護を強化していくための看護管理職の対応やスタッフ教育の必要性などが明らかになりました。

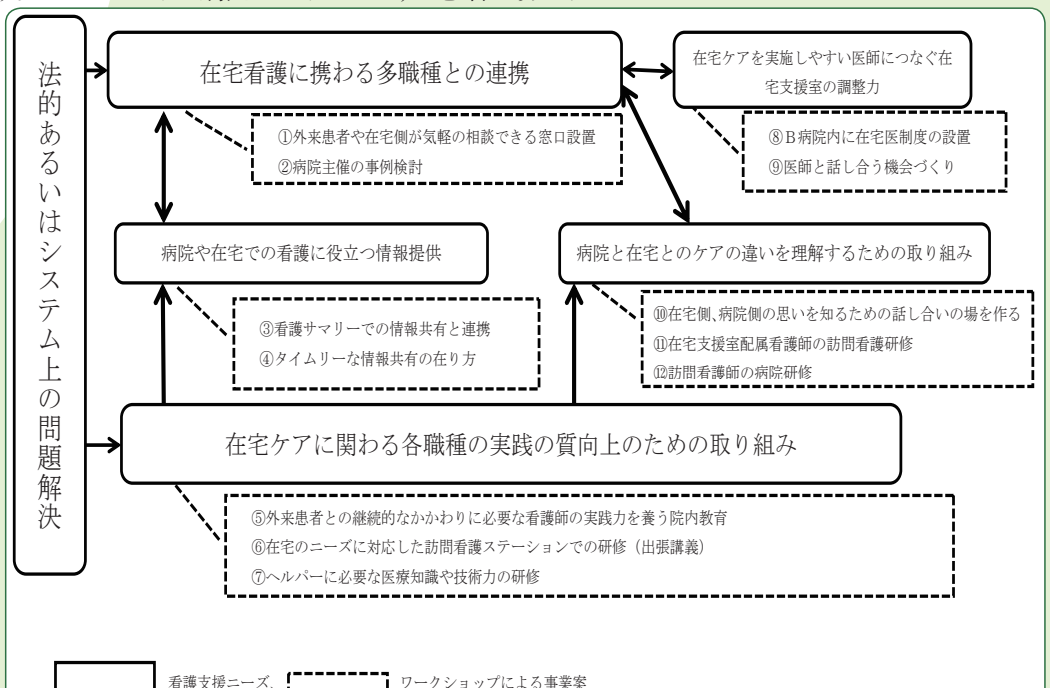


図1. 在宅支援室に求める支援ニーズと事業案関連図

神戸市看護大学紀要、20、23-31,2016、より抜粋